

塩崎遺跡群 (7)

塩崎小学校・水泳プール改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992・3

長野市教育委員会

序

社会生活の変化とともに「ものの豊かさ」から「心の豊かさ」が求められて久しい今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできない必須要件の一つであり、国民共有の財産であることはいうまでもありません。

市民生活の充実、公共の福祉という目的を達成するため、民間・公共を問わず多くの開発事業が実施されることとなりますが、その陰で失われてゆく土地に刻まれた歴史―埋蔵文化財―に対し、私達はその保護・保存と活用という点において大きな責務を負っているともいえるでしょう。

さて、ここに長野市立塩崎小学校水泳プール改築事業に伴う緊急発掘調査を実施いたしました調査報告書を、『塩崎遺跡群(7)』として上梓できましたことはご同慶のいたりと申せましょう。発掘調査は平成3年に実施いたしましたもので調査範囲は遺跡の破壊が懸念される部分という限定されたものでありましたが、重要な遺構や遺物が発見されております。これらの成果は本報告に記載してありますので、文化財に対する一層のご理解と地域文化向上のための一助としてご活用頂ければ、この上ない喜びであります。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、ご尽力いただいた瀬川中島建設・塩崎小学校、調査に参加していただいた地元の皆さん、そして報告書刊行に至るまでご指導・ご援助を賜った各位に、厚くお礼申し上げます。

平成4年3月

長野市教育委員会

教育長 奥村 秀雄

例 言

- 1 本書は、長野市が施工する市立塩崎小学校水泳プール改築事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが直営で実施し、その期間は平成3年10月2日から10月21日まで、実質作業日数は12日間である。
- 3 発掘調査地は、長野市篠ノ井塩崎3333に所在する。
- 4 遺跡名および調査地点は、「塩崎遺跡群—塩崎小学校プール地点—」とする。
- 5 発掘調査実施面積・調査費（報告書刊行費含）は、 $360\text{m}^2 \cdot 3,090$ 千円である。
- 6 本書での遺構記号は、SB（住居址）・SK（土坑）を使用している。
- 7 遺構の測量は、コーディックシステムを援用するため、縮写真測図研究所に委託した。平面図に関して、調査地点の位置および範囲は平面直角座標系第Ⅷ系の座標値に基づき記録されている。標高については、日本水準原点の標高を基準としている。
- 8 本書作成において、整理作業および本文執筆に関しては、矢口忠良・青木和明の指導のもとに寺島孝典が行った。
- 9 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会（埋蔵文化財センター）が保管している。

目次

序

例言

I 調査経過

- 1 調査の契機 1
- 2 発掘調査経過 1
- 3 調査の体制 2

II 塩崎遺跡群の環境

- 1 位置と範囲 3

- 2 塩崎遺跡群の現地形 4

III 調査内容

- 1 調査の概要 5
- 2 弥生時代中期後半 7
- 3 弥生時代後期 13
- 4 古墳時代後期 15
- 5 奈良・平安時代 18

挿図目次

- 図1 塩崎遺跡群と周辺の遺跡群 3
- 図2 塩崎遺跡群の地形概念図 4
- 図3 遺構分布図 6
- 図4 2号住居址出土遺物 7
- 図5 3号住居址出土遺物 7
- 図6 11号住居址 8
- 図7 11号住居址出土遺物 8
- 図8 13号住居址出土遺物 8
- 図9 14号住居址 9
- 図10 14号住居址出土遺物 9
- 図11 17号住居址出土遺物 9
- 図12 2号土坑出土遺物 10
- 図13 6号土坑出土遺物 10
- 図14 9号土坑 11
- 図15 9号土坑出土遺物 11

- 図16 弥生時代中期以前の円板状土製品・石器 12
- 図17 7号住居址 13
- 図18 7号住居址出土遺物 14
- 図19 18号住居址出土遺物 14
- 図20 8号土坑出土遺物 14
- 図21 1号住居址出土遺物 15
- 図22 5号住居址出土遺物 15
- 図23 6号住居址出土遺物 16
- 図24 8号住居址 16
- 表1 8号住居址出土鏝具質量表 16
- 図25 8号住居址出土遺物 17
- 図26 9号住居址出土遺物 17
- 図27 10号住居址出土遺物 18
- 図28 1号土坑出土遺物 18
- 図29 12号住居址出土遺物 18

I 調査経過

1 調査の契機

平成3年9月7日付で、長野市教育委員会総務課より市立塩崎小学校水泳プール改築工事着手の通知があった。過去、学校敷地内では校舎改築・児童館建設等の発掘調査が、昭和52年より4次に亘り実施されており、弥生時代中期から平安時代にかけての多数の遺構が検出されている。また、昭和35年のプール造成時には土師器を主体とする遺物が出土したが、中学校移築時に幻の土器群となってしまった経過があり、施工対象となる地点も埋蔵文化財の包蔵が確実であるため、10月初旬に記録保存のための発掘調査が実施されることとなる。対象面積は900㎡で、そのうち破壊が予想される720㎡について当初発掘調査を実施する予定であったが、施工設計検討の結果、既設大プール底盤を基礎に利用し新設プールを構築する工法が採用されることとなり、既設大プール部分については、埋蔵文化財発掘調査の対象から除外することが妥当との判断に至った。このため発掘調査の対象は地盤改良により埋蔵文化財の破壊が予想される既設小プール部分に限定し、調査面積は360㎡になった。

2 発掘調査経過

【平成3年】

10月2日（曇）表土除去作業開始。

10月3日（晴）発掘器材の搬入。

表土除去作業完了する。

10月4日（晴）SB1～6の検出・掘り下げ作業を開始する。

10月8日（晴）SB1～6の掘り下げ作業を継続。SB8～10の検出・掘り下げを開始する。

10月11日（雨）測量を予定していたが、降雨により中止。

10月14日（曇）コーディックスシステムによる一回目の測量。11日より降り続いた雨で流れ込んだ土砂が遺構面を覆い、その除去に苦慮する。

10月15日（曇）SB7・11～18検出・掘り下げ作業。

10月16日（曇）SK9検出・掘り下げを開始するが、井戸状遺構となる。検出した遺構の掘り下げをほぼ完了する。



表土除去



遺構検出

10月17日（曇）SK9の掘り下げを終え、各遺構の個別写真と全体写真撮影。午後降雨。

10月18日（晴）二回目の測量。塩崎小学校の児童現場見学。

10月21日（晴）発掘器材の撤収。本日をもって現場での発掘作業を終了する。

3 調査の体制

長野市教育委員会埋蔵文化財センターの直轄事業として実施し、その組織は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会教育長	奥村秀雄
総括責任者	長野市埋蔵文化財センター所長	小山正
庶務係	所長補佐	山中武徳(契約・出納事務担当)
"	職員	青木厚子(" ")
調査係	調査係長	矢口忠良
"	主事	青木和明(調査主任)
"	主事	千野浩
"	主事	飯島哲也
"	専門員	中殿章子
"	専門員	横山かよ子
"	専門員	森泉かよ子
"	専門主事	小松安和
"	専門主事	羽場卓雄
"	専門主事	太田重成
調査員	寺島孝典(調査担当)・矢口栄子・青木善子	
調査参加者	太田豊一・北村利雄・西沢乾・塩原恵美子・北沢やすい・矢島喜和子・三宅計佐美・吉沢澄子・立山恵美子・岸田武子・清水節子・宮崎和子・田中きよ江・山田令子・山本恵美子・松崎とみ子・駒村より子・西沢正子・島田茂子・内山直子・深沢優子・高橋清子・三宅利正	
整理参加者	徳成奈於子・岡沢治子・池田見紀・小泉ひろ美・向山純子・西尾千枝・笠井敦子・武藤信子・山崎佐織・橋爪孝次	
遺構測量委託	楠写真測図研究所	

以上、直接発掘調査に参加された方々のほかに、重機の手配・飲料水の提供をしていただいた瀬川中島建設の関係諸氏、駐車場での提供をしていただいた塩崎小学校には感謝の意に絶えない。また、鉄器の保存処理について(財)長野県埋蔵文化財センター調査研究員・白沢勝彦氏にご教示いただいた、記して感謝申し上げたい。

II 塩崎遺跡群の環境

1 位置と範囲

千曲川は、長野盆地南縁部に至るとその流路を蛇行させ、岸川による扇状地形の影響を受けながら長野盆地東縁部を北流する。その最初の大きな蛇行部両岸に顕著な自然堤防が認められ、塩崎遺跡群は上流部の左岸に位置する。左岸の自然堤防上には上流部から塩崎遺跡群・篠ノ井遺跡群・横田遺跡群が連なり、これらの総延長は6 kmにも達する。塩崎遺跡群と篠ノ井遺跡群は便宜上聖川を境に分離しているが一連の性格を有している。

塩崎遺跡群は南北約2 km・東西最大幅600 mの範囲に展開されると予想され、今回の調査地点はそのほぼ中央に位置する。また篠ノ井遺跡群を含めた北西一帯は、古い時代に千曲川の流れ込みによる後背湿地が形成され、現在水田として地目利用されているが、古くから律令体制の影響を受けた条里遺構の存在が予想されていた。石川条里遺跡の本格的な発掘調査は圃場整備の進展に伴い、昭和57年度にその端を発し、以降現在まで継続して行われている。中でも昭和63～平成元年度には長野自動車道建設事業に伴う発掘調査が(財)長野県埋蔵文化財センターによって行われ、弥生時代中期までさかのぼる水田跡が発見され、これ以降各時代にわたり連続と水田が営まれてきていたことが判明されつつある。

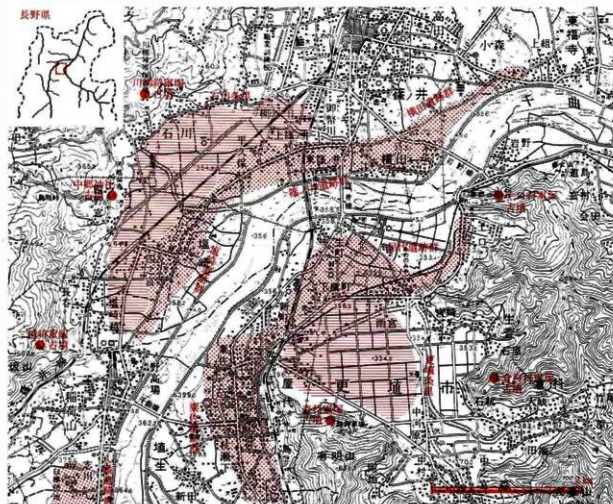


図1 塩崎遺跡群と周辺の遺跡群 (1 : 50000)

2 塩崎遺跡群の現地形

下図は塩崎遺跡群周辺の地形概念図である。調査地点は図のほぼ中央に位置し、北へ向かうにしたがって緩やかに傾斜する微高地にある。また松節から調査地点の東を通り、聖川へぬける部分に1m以上の比高差を有する急激な段差が認められる。これは、旧千曲川の流路がこの辺りまで達していた痕跡であり、自然堤防の存在を一層明瞭にしている。ちなみに、千曲川はその流路を幾度となく変えているが、現在の位置に落着いたのは天保年間である（『塩崎村誌』—〔千曲川筋の変遷〕より）。聖川は、現在山崎地区内を流れる浄信寺川の辺を流れていたが江戸時代に改修され現在の位置へと移されている。その流路の痕跡が浄信寺川周辺に見られるのは非常に興味深いところである。また古老の伝聞によると、千曲川の洪水による冠水を受けても、塩崎小学校付近は浸水されなかったという。校舎改築等で検出された遺構群のあり方はこれを裏付けるものといえよう。

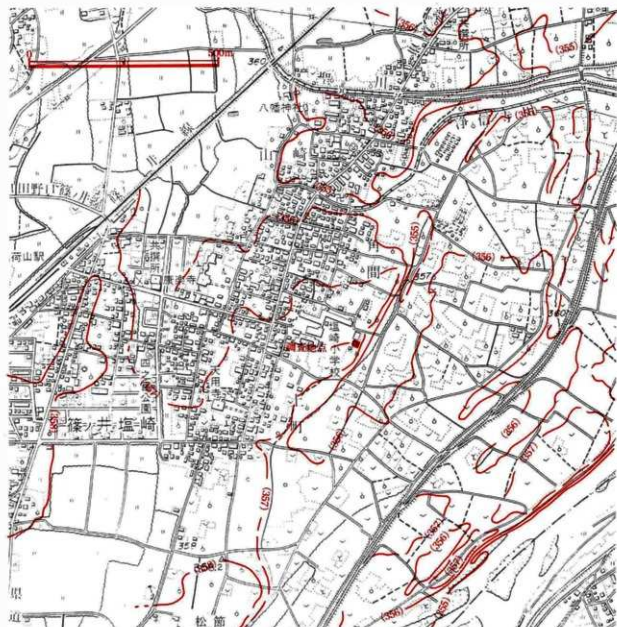


図2 塩崎遺跡群周辺の地形概念図（1：10000）

Ⅲ 調査内容

1 調査の概要

塩崎遺跡群は弥生時代中期から中世に至るまでの複合遺跡(群)であることは過去の調査などから周知されているところである。また最近の調査から、遺構の確認にまでは至っていないが縄文時代晩期から弥生時代中期初頭の資料も増大してきており、周辺に該期の集落が存在する可能性を示唆している。これらのことから考えると、縄文時代晩期(弥生時代前期並行)から現在に至るまでの各時代に集落が営まれていたようである。

塩崎遺跡群での発掘調査歴を見てみると、昭和26年度〔松節遺跡〕での調査を初めとして、昭和52～54年には塩崎小学校校舎改築に伴う発掘調査(校舎地点)が3次にわたって行われ、80軒以上の住居址、建物跡や方形溝溝墓など弥生時代中期以降の遺構を検出している。また昭和60年〔市道松節—小田井神社地点〕での発掘調査では192軒以上にも及ぶ住居址などが確認され、中でも弥生中期前半の住居址とともに31基の人骨・副葬品を伴う木棺墓群が検出されている。これらに代表されるように過去6箇所9地点の調査が行われており、校舎地点と性格を同じくする今回の調査で6箇所10地点目となる。

今回の調査では住居址15軒、土坑8基を検出した。住居址は弥生時代中期後半6軒、弥生時代後期2軒、古墳時代後期6軒、奈良・平安時代1軒である。土坑は弥生時代中期後半2基(2・6号土坑)と該期に比定されるであろう井戸状遺構(9号土坑)1基の計3基、弥生時代後期1基(8号土坑)、古墳時代2基(1・7号土坑)、平安時代以降と推定される井戸跡2基(3・4号土坑)等である。住居址については、調査範囲が限られているため全体の様子を把握できないものが大半であった。



遺構検出・掘り下げ作業

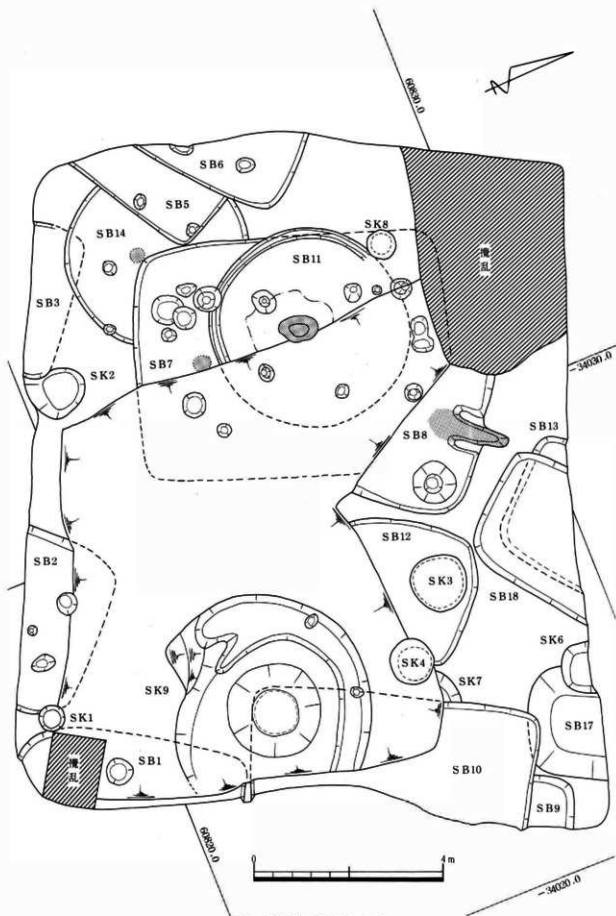


圖3 遺構分布圖(1:80)

2 弥生時代中期後半

2号住居址

住居址北側は攪乱のため、南側は調査区外であるため形態は不明であるが、隅丸方形になるものと思われる。調査区内では柱穴3個を検出したが、炉は確認できなかった。

土器の出土量は少なく、器種には壺(図4-4)と甕(1~3)がある。4は胴上半部分と思われる。甕の口縁部形態には、頭部より鋭く外反するもの(1)と緩やかに外反するもの(2・3)の2種類がみられる。1・3の口唇部には縄文が施文され2の口唇部はユビオサエによる。また、石庖丁と思われる破片(図16-1)が出土している。

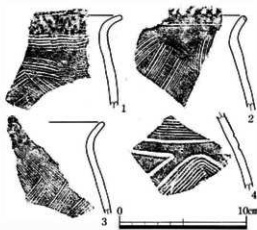


図4 2号住居址出土遺物(1/3)

3号住居址

東・西壁の一部を検出したにすぎないが、形態は隅丸長方形を想定する。調査区内では柱穴・炉等の施設は検出できなかった。

土器の出土量は少ない。器種には壺(図5-7)・甕(2~6)・鉢(1)がある。7は口縁部に縄文を地文として山形文をめぐらし、口唇部にも縄文を施す。2・4・5は櫛描羽状文、3は櫛描波状文、6は鋸歯文を施す。1の外表面には刷毛目が残る。床面から打製石鏃が(図16-3)出土している。

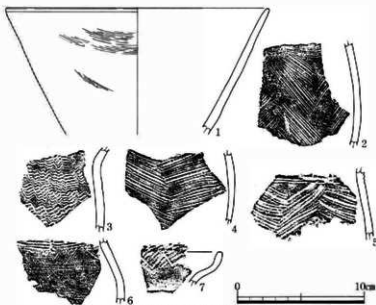


図5 3号住居址出土遺物(1/3)

11号住居址

7号住居址と重複関係にあり、住居址のほとんどを7号住居址床面下より検出した。東側は攪乱を受け、検出できなかったが、形態は円形を呈すると考えられ、規模は直径3.80mを想定する。主柱穴は4個方形配列になる。炉は住居址のほぼ中央に位置し、長軸80cmの楕円形を呈し、床面から15cm掘り込まれ、炭化物で埋まる。床面は炉を中心として堅緻である。また壁際には床面より10cmの深さの周溝がめぐる。

検出面から床面までの住居址覆土が浅いため土器の出土量は少ない。器種は壺(図7-1)と鉢(2)がある。1は胴下半部で内外面共に刷毛目、外面は後に軽い篋ミガキ調整痕を残す。2は内外面共に丁寧な篋ミガキを施し、内面は赤色塗彩する。また、周溝内からは黒曜石製打製石鏃が2点(図16-5・6)出土している。

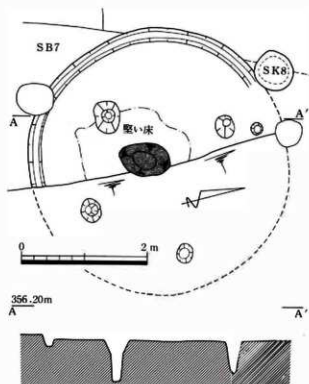


図6 11号住居址(1:60)

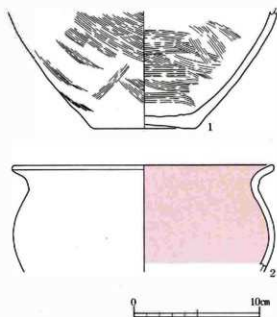


図7 11号住居址出土遺物(1/3)

13号住居址

18号住居址と重複関係にある。北側は調査区外により検出できなかったが、形態は隅丸方形を呈するものと考えられる。調査区内では柱穴・炉等の施設は検出できなかった。検出面からの掘り込みは26cmを測る。

土器の出土量は多いが、ほとんどが小破片である。器種は壺(図8-4・5・10・11・13・14)・甕(1・6・7・8・9・12)・鉢(2・3)がある。4・5は同一個体で注口付壺型土器である。1・6は頭部に簾状文を施す。6は受口状を呈し、1・7・8・9は単純口縁である。10は突帯がめぐる。床面からは小型扁平片刃石斧が(図16-7)出土している。

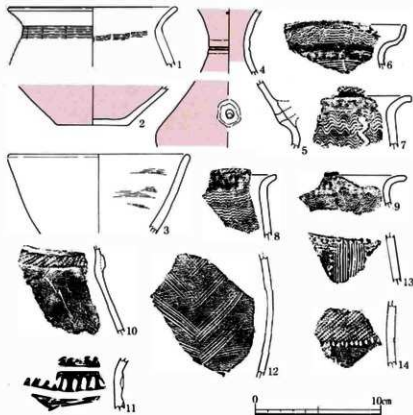


図8 13号住居址出土遺物(1/3)

14号住居址

5・6・7号住居址と重複関係にある。形態は円形を呈し、主軸は3.90mを測る。主柱穴は4個方形配列になる。炉は住居址中央よりやや南寄りに位置しており、直径32cm・深さ6cmを測る円形を呈する地床炉である。

土器の出土量は多くない。器種は甕（図10-1・4・5）と鉢（2・3）がある。1は単純口縁となり、口唇部には縄文を、頸部から胴部にかけて波状文を施す。4は頸部に簾状文、胴部に羽状文を施す。5の口縁部は受口状を呈し、縄文を地文として重山形文を施文、ボタン状突起を貼付する。口唇部は面取りされ縄文を、頸部は平行線文を施す。2・3は内外面共に赤色塗彩を施す。3の口唇部には4個の突起が付されると想定される。

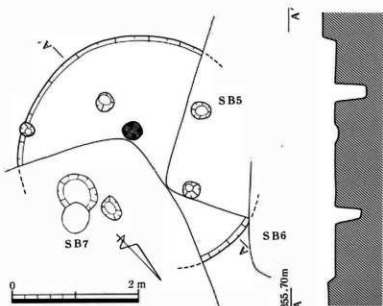


図9 14号住居址(1:60)

17号住居址

10号住居址、6号土壇との重複関係がある。検出面からの掘り込みは45cmを測る深い遺構である。形態は隅丸方形が予想されるが、床面（底面）の状況等から土壇である可能性が高い。

土器は比較的多く出土したが、ほとんどが小破片であった。器種には壺（図11-1～4・7・8）と甕（5・6）がある。1の施文は櫛描平行線文と櫛描刺突文が交互にめぐらされ、刺突文上下を沈線で区画する。他の施文は多様で、縄文と沈線文（2・4・7）・沈線文と櫛描文（3）・櫛描文（5・6）・平行沈線文（8）等がある。また、2の沈線には赤色塗彩の痕跡が残る。

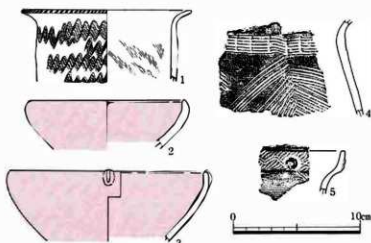


図10 14号住居址出土遺物(1/3)

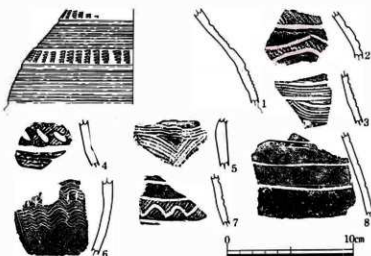


図11 17号住居址出土遺物(1/3)

2号土坑

3号住居址と重複関係にある。形態は円形に近く、規模は長軸90cm×東西軸72cm、検出面からの掘り込みは31cmを測る。

土器の出土量は少なく、甕(図12-1・2)と器種不明土器(3)がある。1は単純口縁となり口唇部には縄文が、頸部には波状文、胴部には羽状文が施文される。2も単純口縁となるが、口唇部はオビオサエによる波状口縁をなし、端部には縄文を、胴部はコ字重ね文を施文する台付甕である。3は杯状を呈する器種・用途不明の土器である。

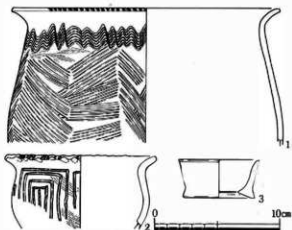


図12 2号土坑出土遺物(1/3)

6号土坑

17号住居址と重複関係にある。北側は検出できなかったが、直径75cm程の円形を想定する。検出面からの深さは12cmである。

土器は多く出土している。器種には壺(図13-1・2)と甕(3・4・5)がある。1は受口状口縁の太頭壺で、2と同一個体である。口唇部・口縁部・頸部に縄文が施され、口縁部は山形文がめぐる。甕は単純口縁の

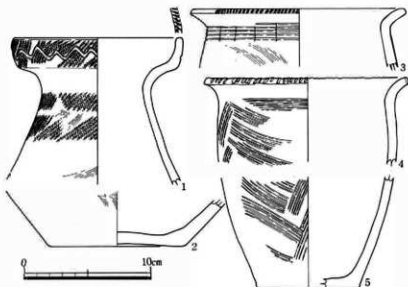


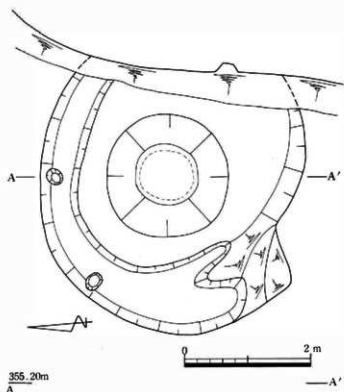
図13 6号土坑出土遺物(1/3)

もので、最大径は口縁部にある。口唇部施文は縄文(3)・篋描列点文(4)で、頸部には縷状文(3)がめぐる。4と5は同一個体で体部に羽状文が施される。

9号土坑

東側は検出できなかったため全容は不明であるが、南北4.20m、深さ30cm程の円形、あるいは楕円形を呈する土坑内に、直径1.95m程の円形土坑を内包する遺構である。西壁から北壁にかけ幅約80cm、深さ5～32cm程の周溝状溝がめぐるされ、北壁下に柱穴が2個ある。円形土坑は検出面から55cmの所で直径約1mになり、これより下部は垂直に掘り込まれる。調査では1.4m掘り下げたところで湧水を見たため、それ以下の調査を断念した。円形土坑・周溝状溝・柱穴等の遺構は一体をなすものと考えられ、井戸跡を想定する。

土器の出土量が多い。器種には壺(図15-1～3・9・12・17)・甕(4～6・10・13・14・16)・台付甕(7・11・15)・蓋(8)がある。甕には櫛描文が多用されるが口唇部に縄文が付されるもの(5・6)口縁部に付されるもの(10)がある。壺は縄文と沈線文が組み合わせた施文が主流であるが、櫛描文のもの(2・3・17)もある。台付甕は櫛描文にボタン状貼付文が見られる。16は弥生時代後期に位置付くものである。石器は、太形始刃石斧(図16-9)・扁平片刃石斧(10)及び石庵丁・磨製石斧の未成品(2・8)が出土している。



355.20m
A

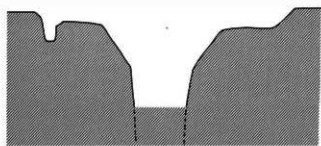


图14 9号土坑(1:60)

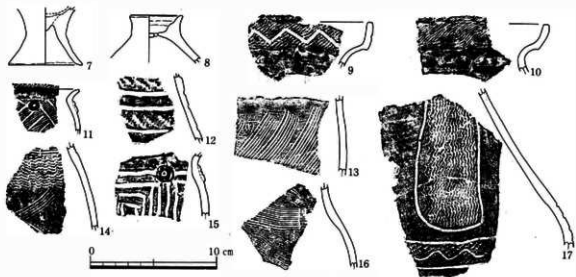
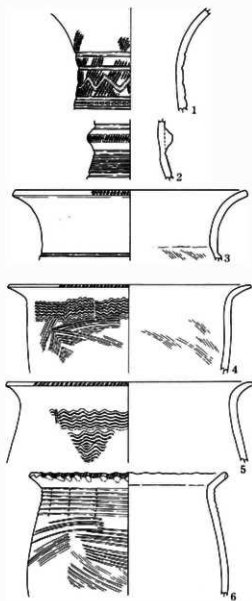


图15 9号土坑出土遗物(1/3)

円板状土製品

2号住居址から1点(図16-①)、14号住居址から2点(②・③)、9号土城から1点(④)の計4点が出土している。①は壺の破損品で、篋状工具による沈線が1本と縄文が施され、懸垂文の一部と思われる沈線と刺突文が見られる。②・③・④は壺の破損品と思われる。③は両面から穿孔途中、④は半分欠損している。

これらの円板状土製品についてその用途ははっきりとしていない。おもに円板の中央に穿孔を持ち、破片の端部を整形して円形に仕上げているところから【土製紡錘車】として取り扱うことが多いが、穿孔途中であったり、中には穿孔のないものも多々見受けられる。大小様々で、壺や壘の他鉢等赤色塗彩されたものなどの破損品を使用(意図的に製作されていると思われるものも各遺跡で若干量見られるが)しており、弥生時代中・後期にその量が多く、該期の遺跡のほとんどから出土しているこの円板状土製品について、その性格・用途目的など現在のところ不明な点が多い。

石器

図16-1は、粘板岩製の石砲丁と思われる破片で2号住居址より出土した。打製石鏢は3号(3)・10号(4)・11号(5・6)住居址より4点出土した。3は珪質頁岩製、4・5・6は黒曜石製で、10号住居址は古墳時代であり流れ込み品である。7は蛇紋岩製の小型扁平片刃石斧で、13号住居址より出土した。2・8~10は9号土城より出土したものである。2は珪質凝灰岩製石砲丁未成品、9は珪質粘板岩製の太形始刃石斧、10は粘板岩製の扁平片刃石斧である。8は蛇紋岩製の擦切技法による磨製石斧未成品であるが、弥生時代にはこういった技法による石器製作はないため、縄文時代晩期以前の所産であろう。

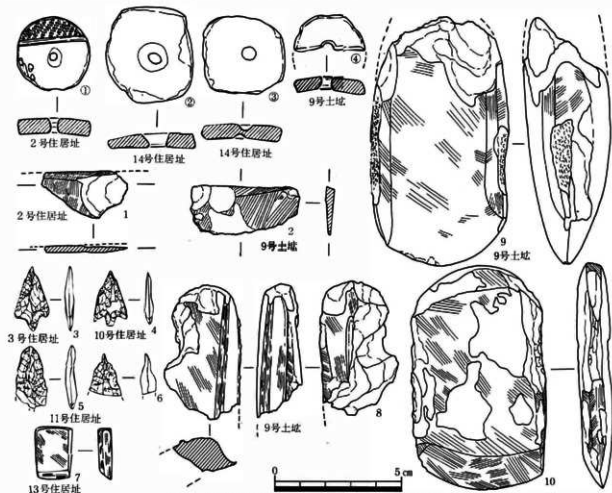


図16 弥生時代中期以前の円板状土製品・石器 (2/3)

3 弥生時代後期

7号住居址

14号住居址、8号土坑と重複関係にある。北壁及び東側半分以上に攪乱を受けているが、柱穴の位置から形態は隅丸長方形を呈し、規模は、長軸6.90m×東西幅5.00m程になるものと想定される。柱穴は9個検出され、支柱穴は4個長方形配列になる。南支柱穴間中央に直径32cm程の地床炉が設けられる。また北支柱穴間中央には連結する2個の柱穴があり、出入口部にあたるため、後産埋納等の特殊な遺構の可能性もある。掘り込みは南壁で15cmを測る。

住居床面までが比較的浅かったため、土器の出土量はさほど多くはない。器種には壺(図18-1・2)・蓋(3)・高坏(4・5)がある。1は口縁部付近の破片と推定され有段状をなし、下端部に

篋描列点文がめぐる。内外面共に赤色塗彩が施される。2の外面は丁寧な篋ミガキが施されるが赤色塗彩はされない。内面には刷毛調整痕が残る。3は内外面共に刷毛調整がみられ、外面は後に軽い篋ミガキで仕上げる。4は高坏坏部で内外面共に赤色塗彩が施され篋ミガキされる。5は高坏坏部で外面のみ赤色塗彩される。6は粘土塊から壺を模したと想定されるミニチュア土器である。内面は棒状工具のようなもので回転を加えながら差し込み、貫通する手前で止めている。

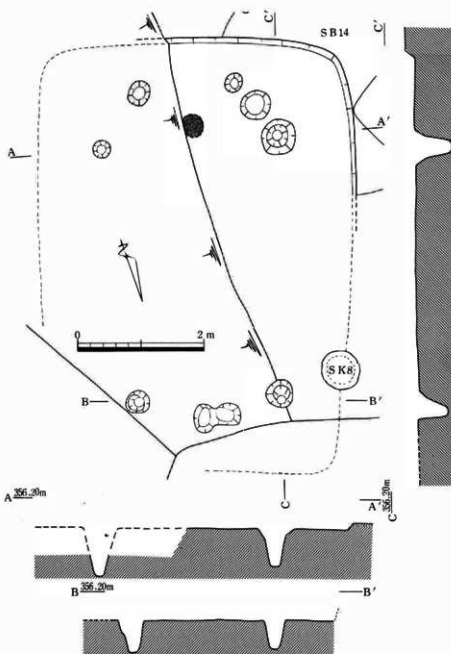


図17 7号住居址 (1:60)

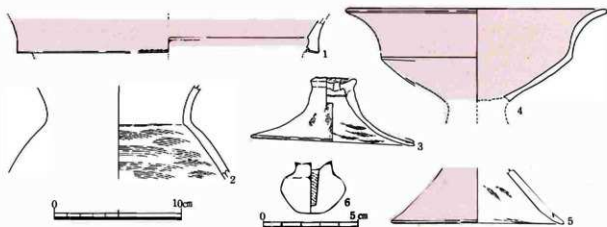


図18 7号住居址出土遺物 (1/3、6のみ1/2)

18号住居址

13号住居址と重複関係にある。形態は北側半分程未検出であるが、隅丸長方形になるものと考えられる。調査区内での柱穴および炉などの検出できなかった。

土器の出土量は少ない。器種には、壺(図19-5・6)・甕(1・2・4)・鉢(3)がある。5・6は同一個体で、肩部に篋描經歯文がめぐり文様部を除き赤色塗彩される。1は

無文の甕で、内外面共に丁寧な篋ミガキが施される。外面には煤が付着している。2は1と同一個体と思われる。3は内外面共に赤色塗彩が施され篋ミガキされる。

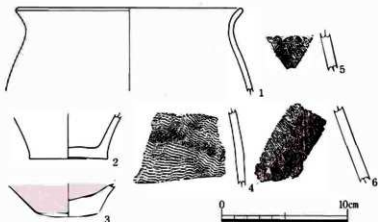


図19 18号住居址出土遺物 (1/3)

8号土壇

7号・11号住居址と重複関係にあり、この中では最も新しい遺構である。直径60cmの円形土壇で検出面からの深さは83cm測る。

土器の出土量は少ない。器種には甕(図20-1~5)があるが、全て同一個体である。1は口縁部、2~5は口縁部から頭部にかけての破片で、7条単位の櫛状工具による波状文が見られ、頭部には簾状文がめぐらされるものと思われる。

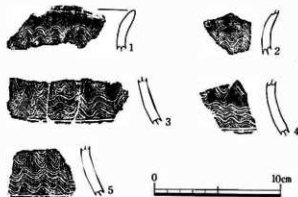


図20 8号土壇出土遺物 (1/3)

4 古墳時代後期

1号住居址

調査区南隅に位置し、北壁・南壁の一部を検出したにすぎず規模等は不明であるが、隅丸長方形を呈するものと思われる。

土器の出土量は非常に少ない。器種には甕(図21-1・2)・環(3)がある。1は内外面共に刷毛

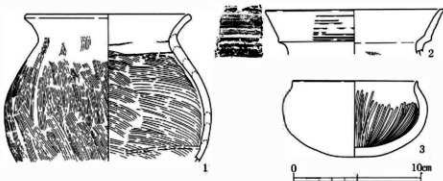


図21 1号住居址出土遺物(1/3)

調整された小型の甕である。2も小型の甕で、頸部で強く屈曲し、口縁部には有段をなし、逆ハの字を呈して外開する。口縁部には浅い凹線文をめぐらし、内面は刷毛ナデのちヨコナデで仕上げる。北陸地方に影響地を求める。3は扁平球形の環で、口縁部は短く直立する。外面は横方向の丁寧な篋ミガキが、内面は底面より放射状に密な篋ミガキを施す。

5号住居址

6・14号住居址と重複関係にある。北側は6号住居址により埋り込まれ、西側は調査区外にあり規模は不明であるが、形態は方形あるいは長方形を呈するものと考えられる。調査区内では柱穴・カマド等住居址に伴う施設は検出されなかった。また、覆土内からは8号住居址に見られたような自然石が多く出土した。出土状況は8号住居址とは異なるが、用途については同様であると考えられる。

土器の出土量は少なく、復元可能なものは調査壁付近から出土した甕(図22-1・2)1個体にすぎない。外面調整は頸部から底部付近までタテ刷毛ナデによる。内面は体部下半までヨコ篋ナデが施されるが、粘土紐の凹凸が著しい。底部付近は刷毛ナデによっている。

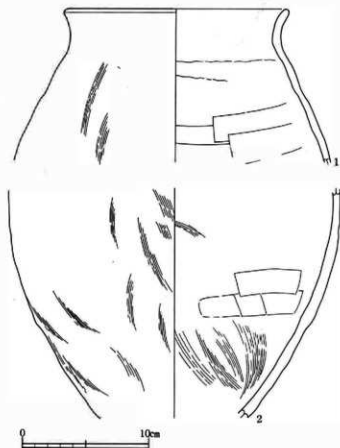


図22 5号住居址出土遺物(1/3)

6号住居址

5号住居址と重複関係にありこれよりも新しい。調査では東隅部を検出したにすぎないため規模は不明であるが、形態は隅丸方形を呈するものと思われる。柱穴は2個検出したが、主柱穴であろう。

土器の出土量は少ない。器種には土器環(図23-1)・甕(3)・高盤? (4)・須恵器環(2)がある。1の内外面は篋ミガキが施され、内面は黒色処理される。1・2の底部外面には「×」刻印(篋記号)がある。3は小型の変形土器で、内外面共に篋ミガキを施し、丁寧に仕上げる。4は高盤の脚部であると思われる。

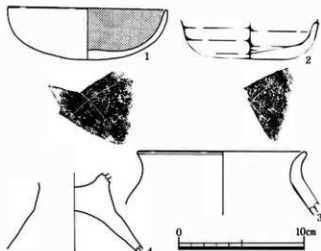


図23 6号住居址出土遺物(1/3)

8号住居址

西・南側の大部は攪乱を受け、東側隅部を検出したにすぎず、規模は不明であるが、形態は隅丸方形を呈するものと思われる。カマドは北壁中央に構築される粘土製同袖形のもので袖部先端には立石が見られた。東隅部に直径90cm程・深さ60cmを測る土坑状の掘り込みが見られ、主柱穴又は貯蔵穴と考えられる。またその南の床面上には楕円形、あるいは柱状を呈する自然石(錘具)の集石が見られた。

土器は多く出土している。器種には土器甕(図25-1・3)・鉢(2)・須恵器蓋(4・5)・環(6)がある。甕には2種類があり、球形胴で外面調整が篋ミガキによるものと、長胴形を呈し、篋ナデで仕上げるものである。鉢は内外面共に篋ミガキが施される。5の蓋はつまみ部が欠損するが、4・6より前出の器形である。また、土坑内からは鉄製の鎌(7)が出土している。

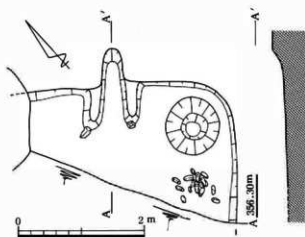


図24 8号住居址(1:60)

集中して出土した錘具は出土状況及び形態から、俵や席編み用の所謂コモゴ石と考えられる。15点が出土した。錘具の質量は表1に示したとおりであるが、大きさ・重量にばらつきが認められ、数組単位で用途に応じて使いわけていたと考えられる。また擦痕のような細かい筋が見られるものもあるが使用した段階で付いたものか否かは不明である。

	全長	最大幅	最大厚	重量		全長	最大幅	最大厚	重量
1	13.0cm	6.8cm	3.0cm	372.9g	9	15.4cm	6.1cm	5.0cm	734.7g
2	12.8cm	6.6cm	3.7cm	405.1g	10	12.3cm	5.7cm	4.8cm	490.8g
3	10.9cm	7.1cm	4.3cm	372.9g	※11	9.6cm	4.4cm	3.8cm	244.6g
4	10.8cm	5.6cm	3.4cm	315.9g	12	14.2cm	7.3cm	4.1cm	586.4g
5	12.6cm	8.1cm	5.1cm	765.0g	※13	8.3cm	4.4cm	2.9cm	120.0g
6	13.7cm	6.3cm	4.6cm	624.1g	※14	9.2cm	6.0cm	3.3cm	268.5g
7	13.5cm	5.8cm	4.8cm	636.9g	15	13.7cm	6.5cm	5.7cm	678.1g
8	13.6cm	6.8cm	4.6cm	676.6g					

※破損品

表1 8号住居址出土錘具質量表

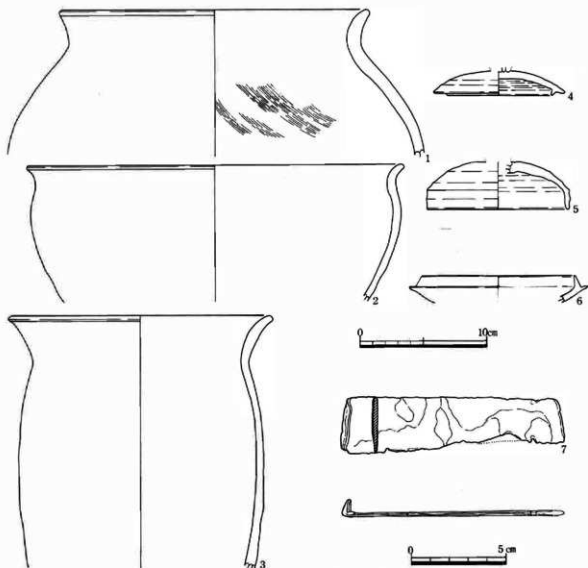


図25 8号住居址出土遺物(1/3, 7のみ1/2)

9号住居址

10号住居址と重複関係にある。住居の大部が10号住居址によって破壊されているため、調査では北東隅一部分を検出したにすぎない。規模等は不明であるが、形態は隅丸方形を想定する。覆土内には頭大程の礫が散乱しており、礫の下より図26-1が出土している。

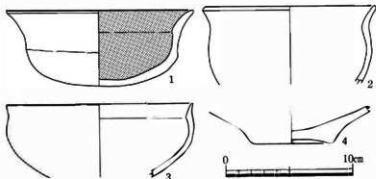


図26 9号住居址出土遺物(1/3)

土器の出土量は少ない。器種には坏(図26-1~3)・壺(4)がある。坏は内外面共に篋ミガキが施される。1は完形で、内面は黒色処理されている。2・3は残存状況が良くない。4は壺の底部であると思われ、内外面調整は篋ミガキによる。

10号住居址

9号住居址と重複関係にある。東側半分程は調査区外にあり、北西隅付近は攪乱を受けるため全容は不明であるが長(南北)軸は6.20mの規模の長方形を呈するものと思われる。

土器の出土量は多いが、そのほとんどが小破片である。器種には壺(図27-1)・甕(2)環(3)・高坏(4)・器台(5)がある。

壺は長胴化傾向にあり、内外面共に筵ナデ調整によって仕上げられている。環は扁平半球形を呈し、筵ミガキが施され、内面黒色処理される。器台は混入品であろう。6は粘板岩製紡錘車で表面には放射状の刻み目が見られる。また混入品と思われる黒曜石製の打製石鏃が1点(図16-4)出土している。

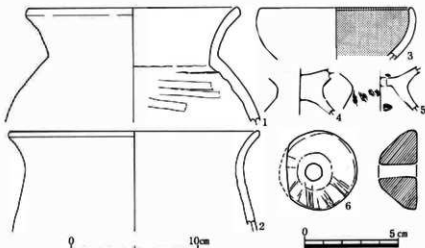


図27 10号住居址出土遺物(1/3, 6のみ1/2)

1号土坑

2号住居址と重複関係にある。直径58cmの円形を呈し、深さ27cmを測る。出土した土器は土師器環1点のみである。内面を黒色処理するもので外面は丁寧な筵ミガキが施されている。

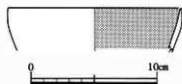


図28 1号土坑出土遺物(1/3)

5 奈良・平安時代

12号住居址

南側半分程は攪乱により破壊されているが、形態は隅丸方形を呈するものと思われる。東西軸は2.80m程の規模になる。柱穴・カマド等は検出されていない。

土器の出土量は少ない。器種には土師器壺(図29-1)、須恵器環(2~4)・蓋(5)がある。壺の口縁部は面取りされ、外面にクロロ目、内面にカキ目を残す。環・蓋はクロロにより仕上げられ、底部で回転糸切離痕(4)がある。

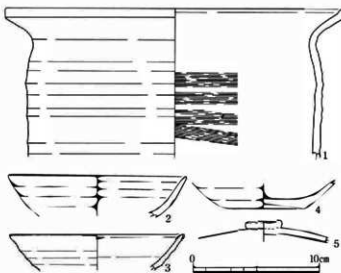


図29 12号住居址出土遺物(1/3)



1号住居址(南より)



2号住居址(北東より)



3号住居址(北東より)



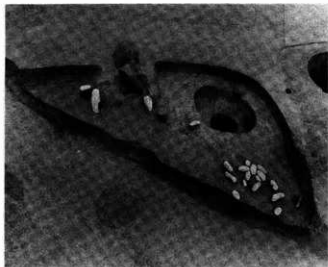
5号住居址(東より)



6号住居址(南東より)



7・11号住居址(北より)



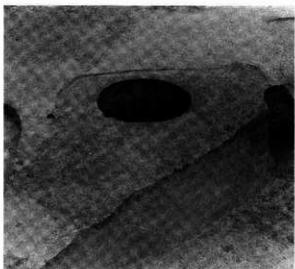
8号住居址(南西より)



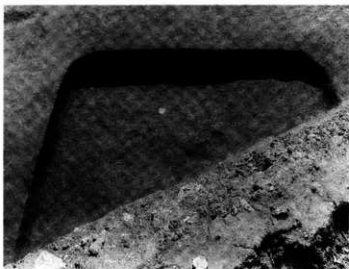
9号住居址(北西より)



10号住居址(北東より)



12号住居址(南西より)



13号住居址(北東より)



14号住居址(西より)



17号住居址(北東より)



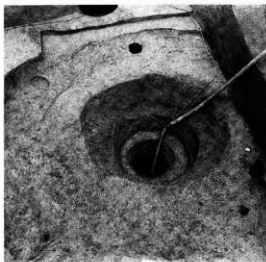
2号土壇(北東より)



6号土壇(北東より)



9号土壇(北東より)



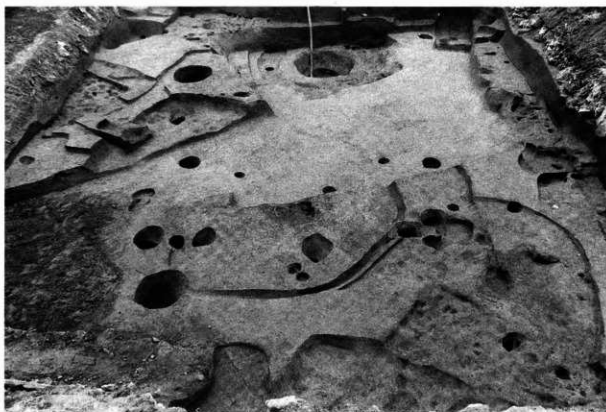
9号土壇(上より)



調査区全体(西より)



調査区全体(北より)



調査区全体(西より)



17号住居址

2号土坑

9号土坑



7号住居址



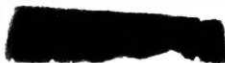
1号住居址(北陸系)



1号住居址



6号住居址(鹿記号)



8号住居址 鉄製鎌



8号住居址



9号住居址



10号住居址
石製紡錘車



石器・円板状土製品

長野市の埋蔵文化財	第1集	『信濃長原古墳群』
"	第2集	『浅川西条』
"	第3集	『中村遺跡』
"	第4集	『塩崎遺跡群』
"	第5集	『塩崎遺跡群(2)』
"	第6集	『三輪遺跡－付水内坐－元神社遺跡』
"	第7集	『田中沖遺跡』
"	第8集	『篠ノ井遺跡群』
"	第9集	『四ッ屋遺跡(第1～3次)・他間遺跡・塩崎遺跡群(3)』
"	第10集	『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』
"	第11集	『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』
"	第12集	『浅川扇状地遺跡群－牟礼バイパスA・E地点遺跡－』
"	第13集	『浅川扇状地遺跡群迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構』
"	第14集	『石川条里的遺構(2)・上駒沢遺跡』
"	第15集	『箱清水遺跡(2)』
"	第16集	『石川条里的遺構(3)・(付上駒沢遺跡)』
"	第17集	『浅川扇状地遺跡群－牟礼バイパスB・C・D地点－』
"	第18集	『塩崎遺跡群IV－市道松節－小田井神社地点遺跡－』
"	第19集	『土口将軍塚古墳－重要遺跡確認緊急調査－』
"	第20集	『三輪遺跡(2)』
"	第21集	『芹田小学校遺跡』
"	第22集	『長野市高田高校グラウンド遺跡』
"	第23集	『横田遺跡群 富士宮遺跡』
"	第24集	『塩崎遺跡群V 殿屋敷遺跡』
"	第25集	『南川向遺跡』
"	第26集	『東番場遺跡』
"	第27集	『小柴見遺跡』
"	第28集	『宮崎遺跡』
"	第29集	『浅川端遺跡』
"	第30集	『地附山古墳群』
"	第31集	『町川田遺跡』
"	第32集	『中条遺跡』
"	第33集	『鶴前遺跡・塩崎城跡』
"	第34集	『石川条里遺跡(4)』
"	第35集	『篠ノ井遺跡群II』
"	第36集	『屋地遺跡II』
"	第37集	『篠ノ井遺跡群III』
"	第38集	『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』
"	第39集	『塩崎遺跡群(6)・石川条里遺跡(5)』
"	第40集	『松原遺跡』
"	第41集	『小島・柳原遺跡群 中俣遺跡・浅川扇状地遺跡群 押羅遺跡・横田遺跡』
"	第42集	『田中沖遺跡II』
"	第43集	『南宮遺跡』

長野市の埋蔵文化財第44集

塩崎遺跡群(7)

平成4年3月20日 印刷

平成4年3月31日 発行

編集 長野市教育委員会
 発行 長野市埋蔵文化財センター
 印刷 奥山印刷工業株式会社